第1節　資料館における展示・情報公開活動

1．第35回企画展『遺跡調査に見る山口大学の原風景2～古代官衙と地方豪族の誕生～』を開催

平成24年度に開催した企画展では、『遺跡調査に見る山口大学の原風景1　中世　集落　誕生』と題して、本学の吉田地区統合移転前に展開していた農業集落と田園風景が室町時代に遡り成立することを、当館の発掘調査成果から解説した。当企画展では、シリーズの第2弾として、中世農村集落成立以前、古墳時代から古代にかけての吉田遺跡に焦点を当てた。

本シリーズは、時代を遡る構成としている。前回は、①現在の山口大学吉田キャンパスの景観　②統合移転前（昭和）の農村風景　③江戸時代中期の絵図に描かれた吉田村と発掘調査成果　④吉田キャンパスにて確認される室町時代農村集落　⑤貿易陶磁など遺物が多量に出土するものの遺構が確認されない鎌倉時代　の順に展示を構築した。

今回は、前回⑤に関連して鎌倉時代に地頭または保司の居館が吉田キャンパス内に存在した可能性を指摘し、その背景として⑥古代（奈良～平安時代）にはキャンパス東－南部丘陵地に官衙が存在していたことを、検出遺構（大型掘立柱建物や総柱建物群）と出土遺物（「官」「主」など墨書土器や円面硯、石製・銅製銙帯、鋳造関連資料など）から解説した。さらに官衙成立の背景として⑦古墳時代中期以降、同じく吉田の丘陵地に集落が営まれ周辺地に古墳が築造されること、特に官衙遺構群が確認される地区の南に隣接する飼料園にて円筒埴輪片が採取されていることから、この地域を支配した豪族の古墳が存在したと推定され、その末裔が官人として律令国家体制に組み込まれた可能性を解説した。

開催期間中、701名の方々に観覧いただいたが、観覧者からはアンケートの回答にて「吉田の地が奈良の昔から開けていることに驚いた」「大学の中に遺跡があるなんてすごい！知っていたら受験していた…と思う」などの声が寄せられた。

本来であれば構内遺跡の通史的資料展示を常設すべきであろうが、約35㎡の狭小な展示スペースではそれも叶わず、企画展示として公開しても本シリーズのように時代を区切って実施せざるを得ない。常設展示は施設の目的や役割を可視化するもので、博物館として「必須の空間」に位置付けられるが、現行施設では資料収蔵もままならぬ状態にある。国立大学を取り巻く環境は年々厳しさを増しているものの、粘り強く施設の拡充・更新を働きかけたい。

写真1　第 35 回企画展ポスター

写真2　展示見学の模様

2. 山口県大学ML連携特別展　共通テーマ「再生」

平成22年度に実施した『大学博物館連携第一弾 EXCHANGE! 山口大学埋蔵文化財資料館×梅光学院大学博物館[註1]』は、翌年度に両大学の図書館を加えた事業に発展を遂げ、県内4大学を巡る山口大学ML連携企画巡回展『風化させない記憶への一歩～自然とともに～』として結実した[註2]。

平成25年度はさらなる大学間博物館・図書館連携を図るため、山口県大学図書館協議会に加盟する大学図書館等に事業参加を呼びかけ、一定期間テーマを共通とした学術資料展示を開催することとなった。その結果、9大学12館が参加し、新たな山口県大学ML連携事業が展開されることとなった。その後会議等により、主催組織として山口県大学ML連携事業事務局を設置すること、テーマを「再生」とすること、開催期間を平成25年10月から翌年1月までとすること、事業ロゴマークを作成すること、スタンプラリーを開催し、達成者にオリジナルグッズをプレゼントすること等事業の詳細が定められていった。

当館では、筆者が事業事務局を務めることとなったため、石丸恵利子教務補佐員が展示を担当した。タイトルを『博物館が繋ぐもの～遺跡を未来へ～』と定め、テーマ別に以下のように展示を構築した。「過去の再生」では県内出土滑石製品を用いて製作から廃棄、再利用の状況を、「現在の再生」では木製品と金属器の保存処理と土器の復元を解説した。さらに「過去へ＆未来への再生」では遺跡調査時の画像と現在の景観を対比させることにより、遺跡を未来へ残すことの意義を観覧者に問いかけた。

会期中304名の観覧者を迎え入れた。前述の理由から入館者は伸び悩んだが、展示を構築することにより中世における県内滑石製品分布状況が確認できるなど、学術研究面で大きな成果が上がるとともに、学内外へ埋蔵文化財保護の重要性、大学博物館の必要性を強く訴えかけることができたと感じる。

【註】

1）横山成己（2014）「大学博物館連携第1弾『EXCHANGE! 山口大学埋蔵文化財資料館×梅光学院大学博物館』を開催」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成22年度－』，山口

2）横山成己（2015）「山口県大学ML連携企画巡回展『風化させない記憶への一歩～自然とともに～』山口大学会場を開催」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成23年度－』，山口　横山成己（2016）「山口県大学ML連携企画巡回展『風化させない記憶への一歩～自然とともに～』梅光学院大学会場・徳山大学会場・山口福祉文化大学会場を巡回」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』，山口

写真3　ミュージアムトークの模様

写真4　ワークショップの模様

3．平成25年度山口大学所蔵学術資産継承事業成果展「宝山の一角」を共催にて開催

平成24年度より、山口大学所蔵学術資産継承検討委員会（以下「委員会」と記す）が主催する事業成果展『宝山の一角』共催館として、展示空間の提供と展示設営協力、会期中の管理運営を行っている。

平成25年度は、昨年度同様前期（平成26年3月1日～4月24日）、後期（平成26年5月12日～6月27日）の2部構成となり、前期は当館所蔵の考古資料「筈倉古墳（山口市秋穂所在）出土品」、工学部所蔵の鉱物・岩石標本「山口県の鉱物」、教育学部所蔵の美術資料「西山陽平作品（立体）」、図書館所蔵の文書「伊藤助太夫宛坂本龍馬書簡（『精魂余芳帖』のうち）」「明治六年以降の政治に関する木戸孝允覚書（『松菊公書翰』のうち）」の実物公開を行った。さらに「万国惣図」「小郡宰判全図（幕末期）」「明治六年地券大絵図（地目地番入上中郷村地図）」のデジタル画像公開も実施した。

後期は人文学部所蔵の考古資料「（伝）長福寺裏山古墳群（岡山県笠岡市所在）出土 鉄鉗」、理学部所蔵の鉱物標本「ゴンドワナ資料（南極・ヒマラヤ等の岩石資料）」、教育学部所蔵の美術資料「西村陽平作品（平面）」、共同獣医学部所蔵の交連骨格標本「馬の仲間の骨格」、図書館所蔵の典籍「元亨療馬集」「新刊京本通俗演義全像百家公案全傳」の実物公開を行った。

昨年に引き続き前期展が山口商工会議所主催の「山口お宝展」への参加も兼ねていたこともあり、学外からの来館者にも恵まれ、入館者数は1,043名に達した。観覧者からは「これからも山大にある様々な資料や技術などを地域にオープンにして欲しい」「継続して2～3回と同じテーマで展示を続けて、山大が所有する財産を公開して欲しい」など、事業の継続を求める声が多数寄せられた。

博物館の4大機能は、①資料収集、②整理保管、③調査研究、④教育普及とされる。本学は未だ大学博物館を有していないものの、大学であることから④を除く機能は本来的に有していなければならない。しかし、本学所蔵博物資料においては各資料を専門とする教員の退職、文書典籍資料においては図書館職員の専門能力の欠如を要因として、②③の機能が著しく低下している現状にある。そのような状況下で委員会は設立され、諸活動を実施しているものと理解しているが、博物館施設を運営する身として僭越ながら申し上げれば、任期ある委員で構成される委員会が「未来永劫」を要する各種資料の継承を立案、実行することは困難である。各部局への専門教職員の配置は言うに及ばないが、資料の危機管理とともに長期的継承計画を担う大学博物館の設置をそろそろ検討すべき時期ではなかろうか。

写真5　前期展ミュージアムトークの模様

写真6　後期展ミュージアムトークの模様

4．平成25年度刊行物

1.『山口大学埋蔵分解資料館年報－平成22年度－』を刊行

平成25年度は、平成22年度に実施した構内遺跡発掘調査概報と資料館活動報告を所収した年報を刊行した。発掘調査関係としては、予備発掘調査3件（吉田2・小串1）、工事立会14件（吉田11・白石1・小串1・光1）の成果が掲載されている。平成22年度は第2期中期計画の初年度であることが原因か、平成20～21年度に比して開発工事数が激減した。本発掘調査が必要な案件もなく、比較的小規模かつ短期の予備発掘調査で対応可能であった。

館の活動報告としては、展示・公開活動として4件の企画展示等事業と、2件の社会教育活動、当該年度刊行物3冊を報告している。その他、田畑直彦による「周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題」と題する論文を付篇として所収している。

2. 山口大学埋蔵文化財資料館通信　第24号『てらこや埋文』を刊行

平成18年(2005)より刊行を開始した広報誌である。当初は季刊として年度4回の刊行であったが、平成23年度以降年度末に「春夏秋冬特大号」と称しての刊行が続いたため、季刊の名称を取り下げることとなった。第25号では、巻頭頁からには3頁にかけて平成25年度の当館の埋蔵文化財保護活動を、3頁から4頁には展示活動、5頁には公開授業の模様、6頁には「資料館この一品」として光市東之庄神田遺跡出土石棒の紹介を、7頁には当館技術職員の連載である内業業務紹介を掲載した。

当館は実施年度の3年後に年報を発行していることから、本冊子は速報性のある刊行物として重要な役割を果たしている。季刊への復活は困難であるが、年度末の刊行を継続したい。

3. 山口県大学ML（Museum・Library)連携事業報告　平成25年度展示テーマ『再生』を刊行

平成22年度より実施している山口県大学ML連携の事業報告書は、事務局員である筆者が編集し、当館が発行している。平成25年度は、前記したとおり9大学12館が参加し、一定期間テーマを共通とした学術資料展示を各館にて開催することとなった。報告書には、開催の経緯と体制（巻頭頁）、各館報告（2～7頁）、年間を通した事務局の活動記録と次年度の活動予定（最終頁）を掲載した。

事業報告書であるため、一般の方は入手困難と思われるが、公立図書館には送付しており、閲覧可能である。その他、山口県大学ML連携事業公式web（http://www.oai.yamaguchi-u.ac.jp/ml/）においてデジタル公開も行っているので、興味のある方はご一読いただきたい。

写真7　平成25年度埋蔵文化財資料館刊行物